

平成 29 年度「つながる食育推進事業」成果報告書

受託者名	福岡県教育委員会
モデル校名称	宇美町立宇美小学校
対象学年及び人数	全学年、685人
栄養教諭等の配置	平成27年から栄養教諭が1人配置

1 取組テーマ

食生活習慣を改善し、進んで健康な体づくりに取り組む子どもの育成
～みんなで取り組む「つながり」を大切にしたい夢ビジョン UMI 食育プログラム～

2 推進委員会の構成

委員長	沖田 千代	福岡女子大学 名誉教授
副委員長	山本 浩	宇美町教育委員会教育長
委員	太田 雅規	福岡女子大学 教授
委員	安倍 ちか	九州栄養福祉大学 准教授
委員	梅木 陽子	福岡女子大学 講師
委員	寺崎 雅巳	福岡県教育庁教育振興部体育スポーツ健康課長
委員	安森 葉子	福岡県教育庁福岡教育事務所指導主事
委員	原田 和幸	宇美町教育委員会学校教育課長
委員	藤井 龍一	宇美町教育委員会指導主事
委員	江副 貴子	宇美町教育委員会係長
委員	安川 禎幸	宇美町役場健康づくり課長
委員	添田 勝春	宇美町役場農林振興課課長補佐
委員	佐々木 壮一朗	宇美町食育推進アドバイザー
委員	大堀 喜哉	宇美町商工会代表
委員	桑原 朱實	宇美町健康づくり推進会会長
委員	川本 徹	宇美町立宇美小学校長
委員	林 宏樹	宇美町立宇美小学校主幹教諭
委員	河口 香	宇美町立宇美小学校栄養教諭
委員	奥園 麻紀	宇美町立宇美小学校養護教諭
委員	岡部 康文	宇美町立宇美小学校学校医
委員	平松 利明	宇美町立宇美小学校PTA代表
委員	大田原 寛	大塚製薬株式会社

3 連携機関及び連携内容

連携機関名	連携内容
福岡女子大学	食育プログラムに関する指導・助言、アンケート等の
九州栄養福祉大学	調査結果の評価・分析
宇美町給食応援団 (宇美町教育委員会・地域コミュニティ ・J A・生産者団体等)	給食の時間の訪問指導 食に関する体験活動への協力 食に関する各種イベントへの協力
宇美町商工会	啓発プログラムへの協力 食に関する各種イベントへの協力

4 取組前のモデル校の状況

宇美小学校は、平成24年度からコミュニティスクールとして学校、家庭、地域が連携した教育活動に取り組んできた。食育については、これまで「発達段階に応じた『弁当の日』の取組」「親子料理教室」「子ども料理コンクールの取組」「栄養教諭を中核とした教科、道徳、特別活動等における食に関する指導」等の取組を行ってきた。平成28年度には、スーパー食育スクール事業の実施校として学校と家庭、地域、関係機関が連携・協働し、町ぐるみの食育プログラムを実施した。

一方、朝食を「あまり食べない」「全く食べない」と回答した児童の割合が8.0%（平成28年度全国学力学習状況調査から）となっており、朝食を食べる習慣が身に付いていない児童がいる。また、昨年度、希望する児童・保護者を対象に実施した血液検査の結果、児童の約3割（保護者は約4割）について糖尿病の診断基準となるヘモグロビンA1cの値が基準値を超えていることが明らかとなった。

昨年度実施した食育プログラムにより、児童の食に対する意識の向上は認められたが、その後の行動化、習慣化にまでは至らなかった。そのため、一部の保護者だけではなく、より多くの保護者が「食」について自分自身や子供の切実な課題として考える機会を増大させる必要がある。

5 評価指標の設定について

(1) 共通指標について

- ① 児童生徒の食に関する意識に関すること
 - ア 朝食を食べることへの価値
 - イ 共食をすることへの価値
 - ウ 栄養バランスを考えた食事をとることへの価値
 - エ ゆっくりよく噛んで食べることへの価値
 - オ 食事マナーを身に付けることへの価値
 - カ 伝統的な食文化や行事食を学ぶことへの価値
 - キ 食事の際に衛生的な行動をとることへの価値
 - ② 朝食を欠食する児童生徒の割合
 - ③ 児童生徒の共食の回数
 - ④ 栄養バランスを考えた食事をとっている児童生徒の割合
- ※ 共通指標は、児童及び保護者アンケートによって測定する。

（２）独自指標について

- ① 「給食が好き」な児童の割合
- ② SOC（首尾一貫感覚）が高まった児童の割合

※ 独自指標については、児童アンケートにより測定する。

6 実践内容（評価指標を向上させるための仮説（筋道）を含めて）

学校を中心とし、関係機関等が連携した家庭を巻き込んだ『食育プログラム』と『啓発プログラム』を実施した。なお、『食育プログラム』の構築・実施にあたっては、継続的な実践につながるように「意識化」→「行動化」→「継続化」という一連の取組になるようにした。

【学習指導における『食育プログラム』】

① 保護者参加型の教科等における食に関する指導

◇プログラムの概要

- ・ 教科等の学習をとおして自分自身の食習慣等について振り返り、課題意識を高め、さらに改善に向けた実践へとつなげた。

◇家庭へのアプローチの視点

- ・ 保護者への公開・参加型の授業
- ・ 保護者に向けた「参観ガイド」の配布
- ・ 家庭と連携した指導後の家庭での実践
- ・ 児童が作成した学習の成果物を保護者へ配布



【保護者参加型の授業】

② 豊かな体験活動を位置付けた食に関する指導

◇プログラムの概要

- ・ 栽培活動や調理活動等の食に関する豊かな体験活動をとおして、食に関する関心や知識、調理等に関する技能を高め、さらに学習したことを実生活へとつなげた。

◇家庭へのアプローチの視点

- ・ 栽培・調理活動等への保護者の参加の呼びかけ
- ・ 家庭と連携した指導後の家庭での実践（家庭科等）
- ・ 児童が作成した学習の成果物を保護者へ配布



【地域の方との栽培活動】

【日常指導における『食育プログラム』】

③ 給食応援団による給食訪問サポート

◇プログラムの概要

- ・ 給食の時間に保護者・地域の方で構成される「宇美町給食応援団」が食事のマナーや食べ方等について、各学級を訪問しサポートを行った。

◇家庭へのアプローチの視点

- ・ 宇美町給食応援団への参加の呼びかけ



【給食応援団の給食訪問】

④ 給食大好き！「もぐもぐカード」を活用した取組

◇プログラムの概要

- ・ 毎日の好き嫌いをせずに給食を食べることができたかどうかを振り返って記録する「もぐもぐカード」を活用し、残さず食べようとする意識を高めた。

◇家庭へのアプローチの視点

- ・ 「もぐもぐカード」へのコメント記入への協力
- ・ 「もぐもぐカード」をとおした子どもの給食の実態把握

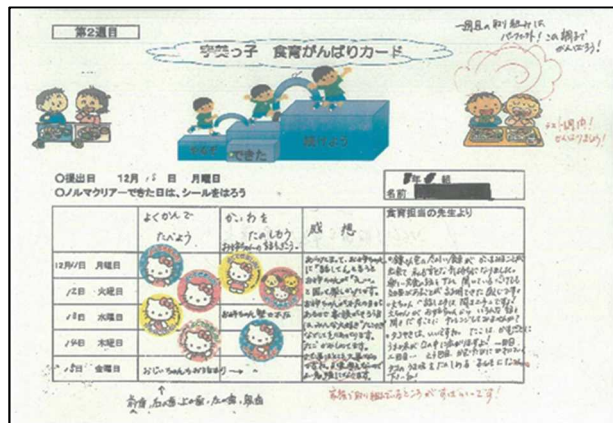
⑤ 関係者が連携した個別的な相談指導

◇プログラムの概要

- ・ 学校と町が連携し、児童の個別の健康課題の解決に向けて保護者の理解を得ながら、個別的な相談指導を行い、生活習慣等の改善を図った。

◇家庭へのアプローチの視点

- ・ 担任、養護教諭、栄養教諭が連携した保護者への働きかけ
- ・ 学校と町（保健センター）の情報の共有、行動の連携



【がんばりカードを活用した学校と家庭が連携した取組】

【家庭を中心として行う『食育プログラム』】

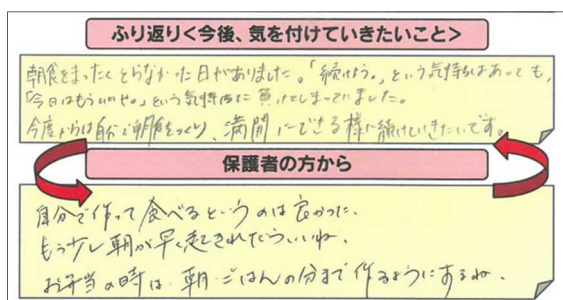
⑥ 「朝食いきいきシート」を活用した学校と家庭が連携した取組

◇プログラムの概要

- ・ 児童自身が自分の朝食について振り返る（朝食を食べたかどうか、栄養のバランスは整っていたか）ことができる「朝食いきいきシート」を活用して栄養バランスのよい朝食を食べようとする意識を高めた。

◇家庭へのアプローチの視点

- ・ 「朝食いきいきシート」へのコメント記入への協力
- ・ 取組をとおした朝食の大切さの啓発



【児童と保護者のふり振り返り】



【取組に活用した朝食いきいきシート】

⑦ 学校と家庭との食育をつなぐ「子どもが作る弁当の日」の取組

◇プログラムの概要

- ・ 発達段階に応じて、自分の力で弁当を作り、学校で会食をする「子どもが作る弁当の日」を実施し、食に関する関心を高め、食に関する自己管理能力を育成した。



【弁当の日の会食の様子】

◇家庭へのアプローチの視点

- ・ 「弁当の日」のねらい、目標についての学校と家庭で共通理解
- ・ 家庭での児童への関わり方について学校と家庭で共通理解
- ・ 「弁当の日」の児童の様子や成長について保護者へ発信

	児童の活動	ねらい
低学年	・ 家の人と一緒に献立（メニュー）を考える。 ・ 家の人と一緒に買い物に行く。 ・ 自分でお弁当箱に詰める。	・ 食に関心をもつ ・ 食品を選択する力 ・ 食事の楽しさ
中学年	・ 家の人と一緒に献立を考え、買い物に行く。 ・ 自分で弁当箱に詰める。 ・ おにぎりを作るなどの簡単な調理や手伝いをする。	・ 食に関心をもち、食事の重要性を知る ・ 食品を選択する力 ・ 食事の楽しさと調理の実践化
5年生	・ 中学年までの内容 ・ 5年生での家庭科の学習を生かし、卵・野菜をゆでる料理等を自分で作る。	
6年生	・ 中学年までの内容 ・ 5・6年生での家庭科の学習を生かし、栄養バランスを考えて献立を決め、できるだけ自分で調理をする。	

⑧ 「子ども料理名人」の取組

◇プログラムの概要

- ・ 夏休みに自分で挑戦する「級」を決め、家庭で料理作りに取り組むことで料理作りの楽しさや食に関する関心を高めた。

◇家庭へのアプローチの視点

- ・ 児童の料理作りに対するアドバイス等の関わり

- ① 担任及び栄養教諭から取組の趣旨や各級の内容、実施方法や提出方法を説明する。
- ② 児童は、夏休み期間中に、自分の挑戦する級の料理を考え、料理を作る。
- ③ 応募方法に沿って、応募用紙を作成し夏休み明けに提出する。
- ④ 学校からそれぞれ挑戦した級の認定証を配布する。
- ⑤ 料理名人の掲示コーナーを設置し、各級代表の料理を掲示する。

⑨ PTAが行う「食生活振り返りシート」を活用した取組

◇プログラムの概要

- ・ 学年ごとにテーマを設け、長期休業中に家庭において取組を行った。各学年のテーマ・取組内容については、児童の実態等を踏まえて設定した。

◇家庭へのアプローチの視点

- ・ PTA委員によるテーマ・取組内容の設定
- ・ 取組カードへのコメント記入の協力
- ・ 実施率や取組状況の保護者との情報共有

【食生活振り返りシート】

【関係者が連携した町ぐるみ・地域ぐるみの『啓発プログラム』】

⑩ 「うみ朝食の日」「うみ共食の日」の取組

◇プログラムの概要

- ・ 毎月19日を「うみ共食の日」「うみ朝食の日」とし「共食」や「朝食」の大切さについて町ぐるみ、地域ぐるみで啓発した。

◇家庭へのアプローチの視点

- ・ 学校をととした「共食」「朝食摂取」の呼びかけ
- ・ 公共施設、スーパー等への啓発パネルの設置
- ・ 広報誌、リーフレットによる啓発



【町のイベントでの啓発】



【簡単朝食レシピの実演】



【啓発ポスター】

⑪ 「親子料理教室」の実施

◇プログラムの概要

- ・ 児童と保護者が互いに協力しながら楽しく郷土料理を学び、食事を作る楽しさや伝統的な食文化についての関心を高めた。

◇家庭へのアプローチの視点

- ・ 親子での参加の呼びかけ



【親子料理教室の様子】

⑫ 食をテーマにした保護者対象の講習会の開催

◇プログラムの概要

- ・「孤食」「朝食欠食」等、子どもを取り巻く食に関する環境をテーマとした講習会を開催し、保護者の食に対する意識を高めた。

◇家庭へのアプローチの視点

- ・参加する保護者の拡大のための工夫

⑬ 「宇美町学校給食フェア」の取組

◇プログラムの概要

- ・家族みんなで楽しく参加することをおして、食に対する興味関心を高め、家庭での食生活改善や児童の望ましい食習慣の形成につなげた。

◇家庭へのアプローチの視点

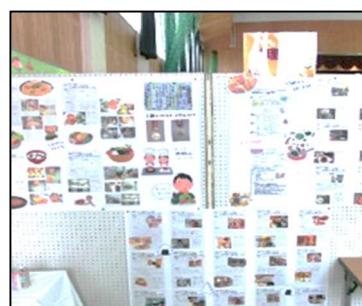
- ・親子での参加の呼びかけ
- ・家族ぐるみで参加できる食に関する体験コーナーの工夫



【豆つかみコーナー】



【人気の給食献立紹介コーナー】



【子ども料理名人の掲示】

⑭ 地域との連携(異校種交流)

◇プログラムの概要

- ・高校生との交流をおして、地域ぐるみで児童の食について考えるという意識の向上を図った。

◇家庭へのアプローチの視点

- ・食をおした地域の高校生と児童の交流

< 10月12日献立(食物繊維) >
むぎごはん、もずくのみそ汁
ハンバーグ(きのこソース)
ごぼうサラダ、やめちゃムース

< 10月16日献立(カルシウム) >
きなこあげパン、ミネストローネ
てりやきチキン、おからサラダ
ヨーグルト

< 10月17日(鉄分) >
わかめごはん、きのこのみそ汁
とりのからあげ、小松菜のおかか和え
りんごゼリー

【高校生が考えた学校給食の献立】



【栄養教諭による高校生への指導】

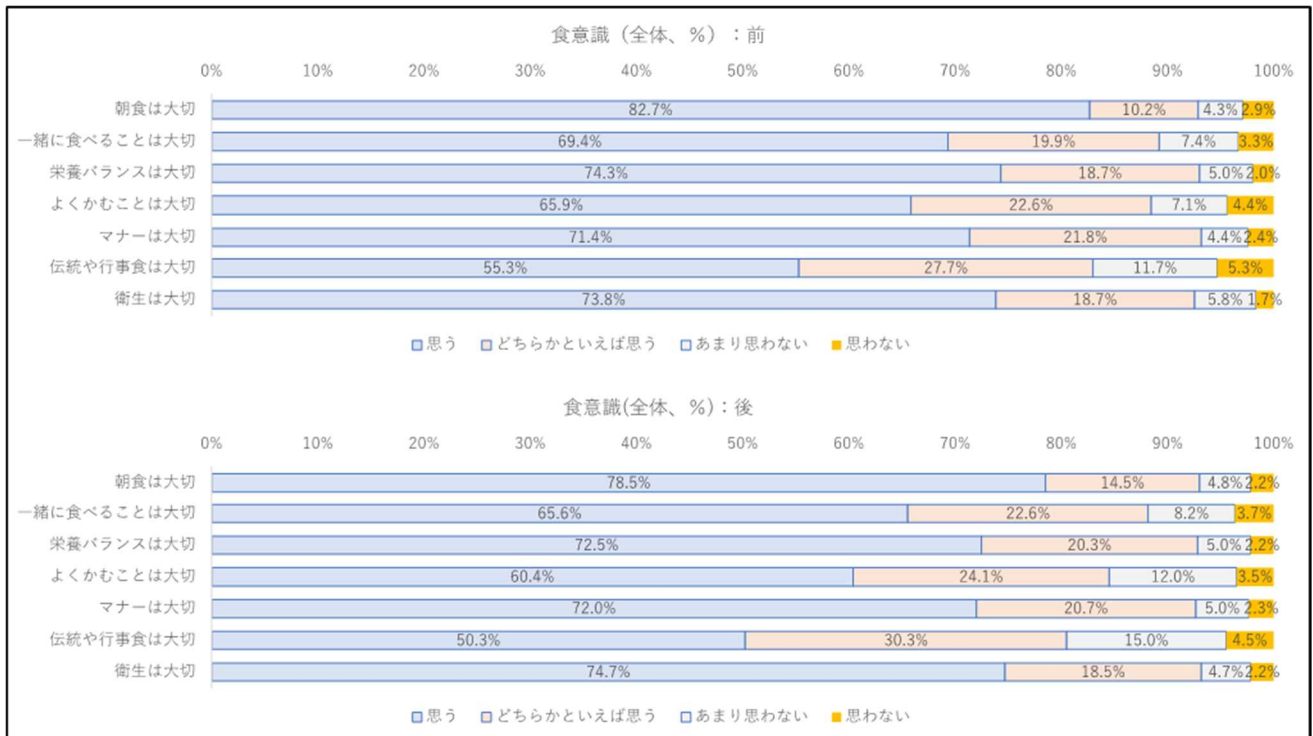


【給食の時間の高校生との会食】

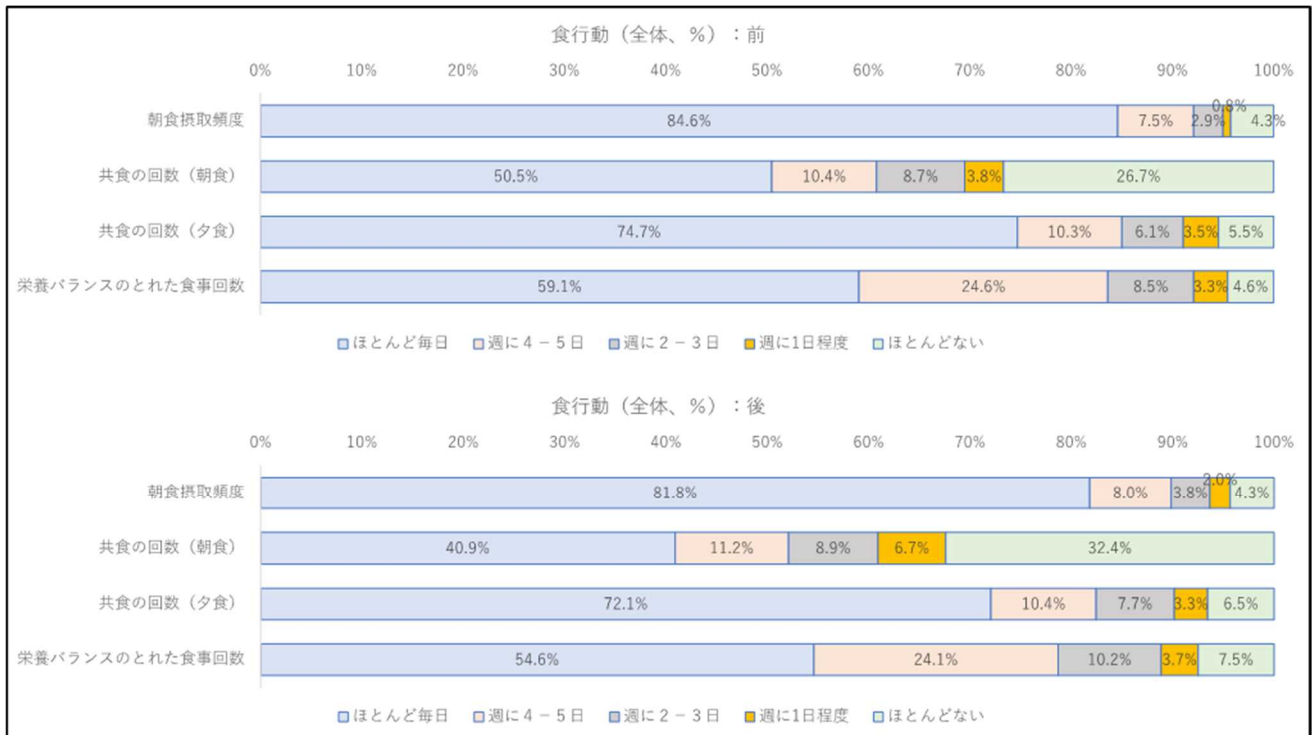
7 評価指標の測定結果

(1) 共通指標について

【食意識について：児童アンケートから】



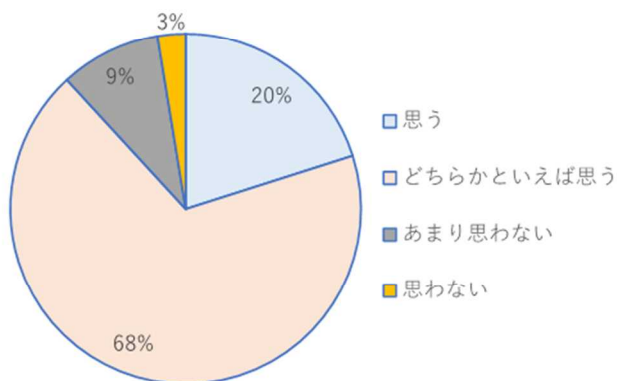
【食行動について：児童アンケートから】



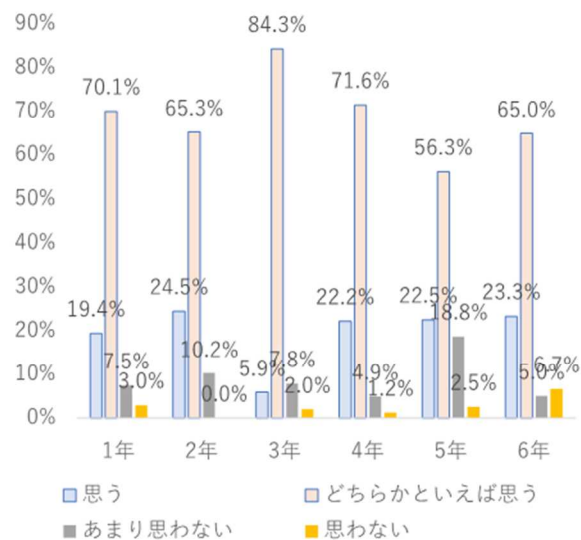
【食に対する意識の高まりについて：保護者アンケートから】

食育による子どもの意識の変化

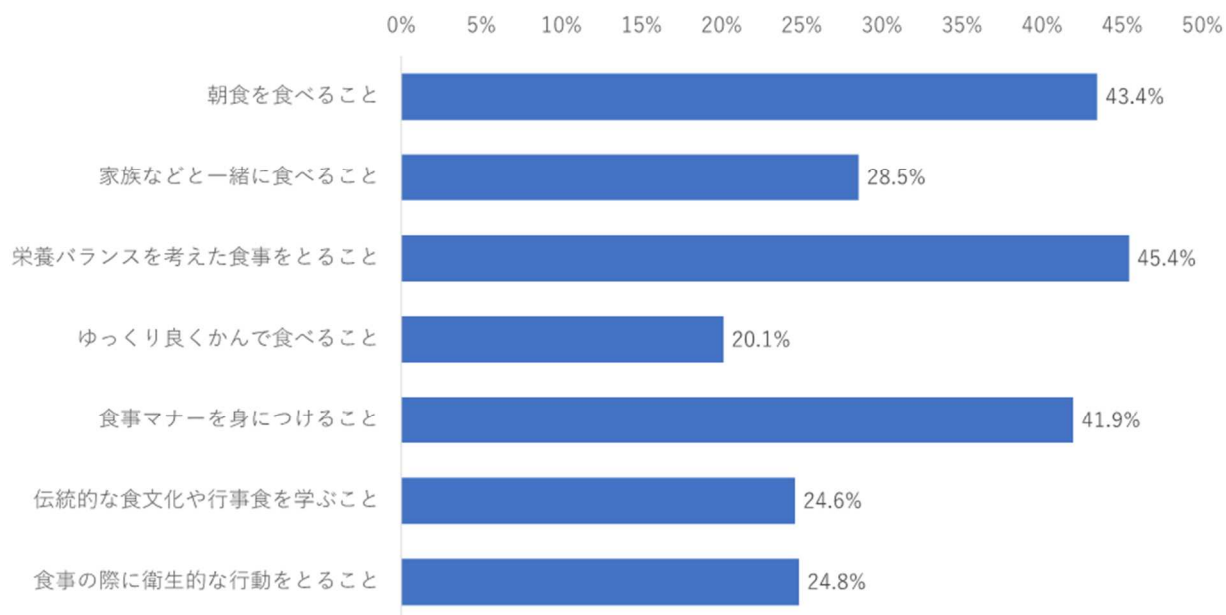
子どもの食意識向上



学年別子どもの食意識向上



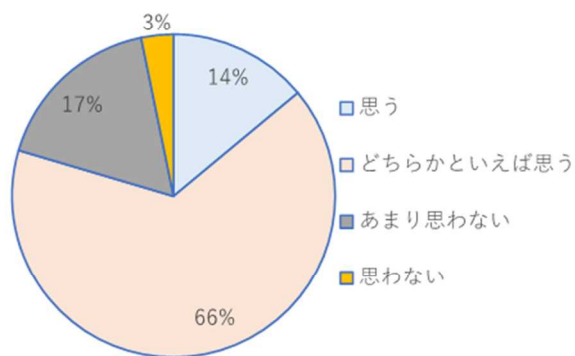
食意識の高まった項目（複数回答）



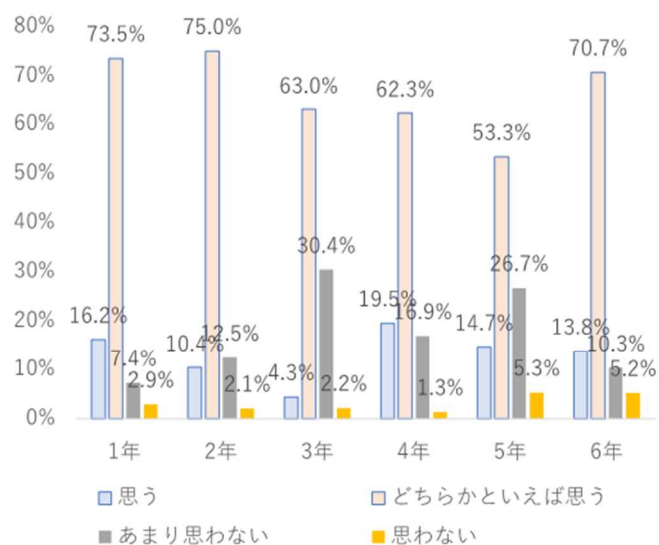
【食習慣の変容について：保護者アンケートから】

食育による子どもの食習慣の変化

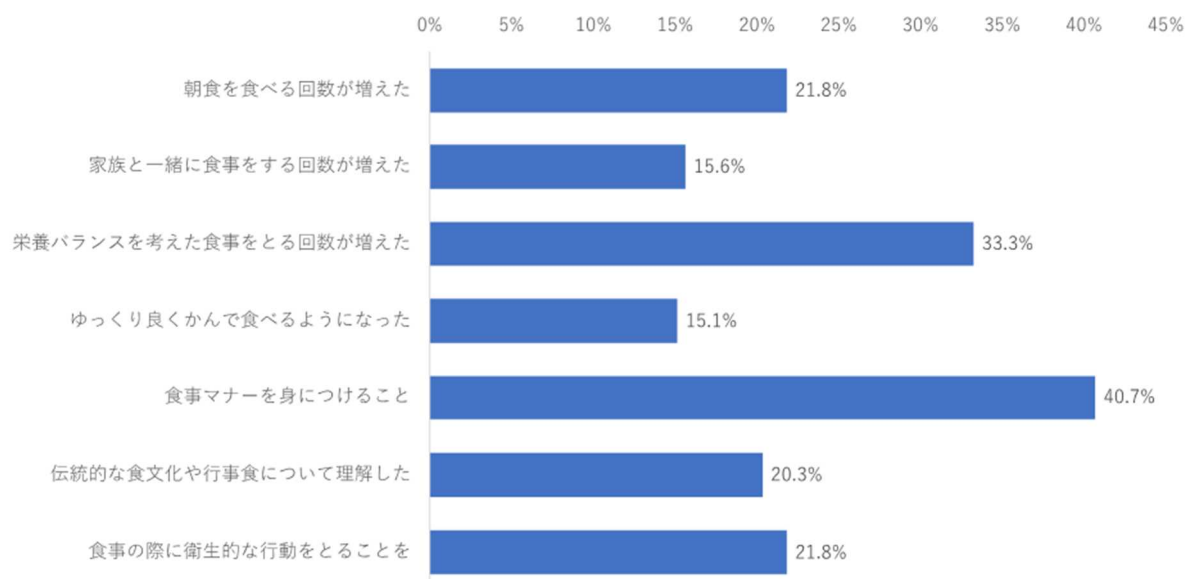
食育による子どもの習慣の変化



食育による子どもの習慣の変化（学年別）

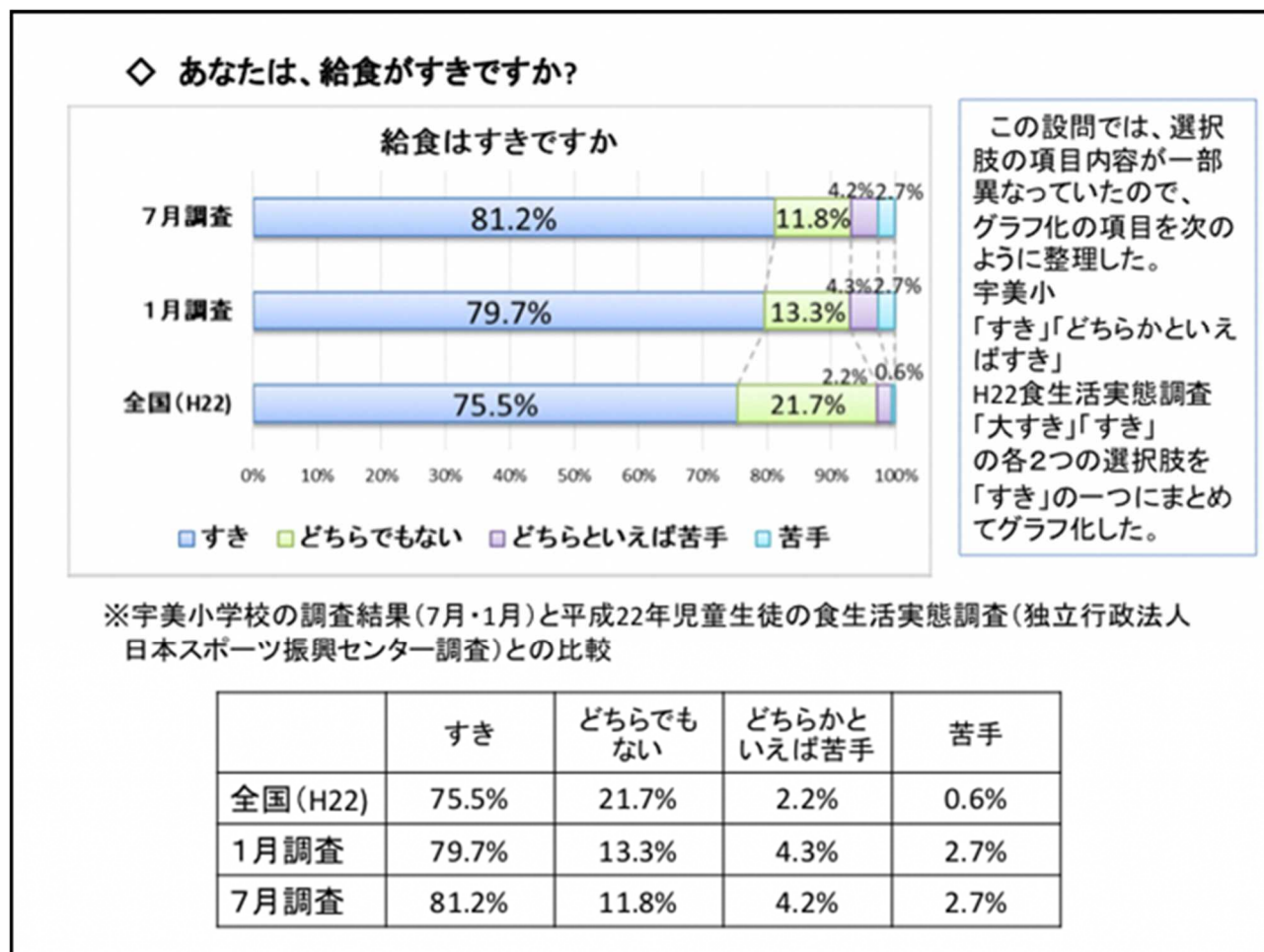


改善された食習慣（複数回答）



(2) 独自指標について

【「給食が好き」な児童の割合：児童アンケートから】



【食育により SOC が高まった児童の割合：児童（4～6年生）アンケートから】

表 1 SOC に対する食育の効果（全体, N=306）

	前		後		p 値
有意味感	78.6	±15.3	77.0	±14.7	0.039
把握可能感	75.0	±16.2	75.5	±15.5	0.619
処理可能感	77.1	±17.1	77.2	±16.6	0.909
SOC スコア	76.8	±13.9	76.5	±13.5	0.675

表 2 SOC に対する食育の効果(男女別)

	男児, N=167					女児, N=139				
	前		後	p 値		前		後	p 値	
有意味感	76.6	±16.1	74.3	±15.8	0.032	80.9	±14.0	80.3	±12.5	0.552
把握可能感	74.2	±17.0	73.5	±15.8	0.552	76.0	±15.2	77.8	±14.8	0.188
処理可能感	76.9	±19.0	75.6	±18.5	0.261	77.3	±14.5	79.1	±13.8	0.133
SOC スコア	75.8	±14.9	74.4	±14.5	0.110	77.9	±12.5	79.0	±11.8	0.276

表 3 SOC に対する食育の効果(学年別, 4 年生, N=101)

	前		後		p 値
有意味感	82.6	±16.4	78.6	±14.9	0.005
把握可能感	74.7	±17.6	73.7	±16.3	0.583
処理可能感	78.0	±17.8	75.7	±17.2	0.171
SOC スコア	78.2	±14.5	75.8	±14.1	0.090

表 4 SOC に対する食育の効果(学年別, 5 年生, N=104)

	前		後		p 値
有意味感	77.3	±13.8	75.5	±14.8	0.179
把握可能感	76.7	±17.1	76.3	±15.2	0.787
処理可能感	78.3	±17.3	77.7	±17.1	0.663
SOC スコア	77.4	±14.2	76.5	±13.8	0.393

表 5 SOC に対する食育の効果(学年別, 6 年生, N=101)

	前		後		p 値
有意味感	75.9	±15.1	77.1	±14.4	0.317
把握可能感	73.7	±13.7	76.5	±15.0	0.033
処理可能感	74.9	±16.0	78.1	±15.4	0.023
SOC スコア	74.8	±12.6	77.2	±12.8	0.012

表 6 食育により SOC が高まった児童の割合(全体, N=306)

	改善した児童(人)	不変・悪化した児童(人)	SOC が高まった児童の割合
有意味感の変化	118	188	38.6%
把握可能感の変化	130	176	42.5%
処理可能感の変化	139	167	45.4%
SOC の変化	143	163	46.7%

表 7 食育により SOC が高まった児童の割合(男女別)

	男児			女児		
	改善群 (人)	不変・悪化群(人)	SOCが高まった 児童の割合	改善群 (人)	不変・悪化群(人)	SOCが高まった 児童の割合
有意味感の変化	65	102	38.9%	53	86	38.1%
把握可能感の 変化	64	103	38.3%	66	73	47.5%
処理可能感の 変化	71	96	42.5%	68	71	48.9%
SOC の変化	69	98	41.3%	74	65	53.2%

表 8 食育により SOC が高まった児童の割合(学年別)

	4 年生			5 年生			6 年生		
	改善群 (人)	不変・悪化 群(人)	高まった 児童	改善群 (人)	不変・悪化 群(人)	高まった 児童	改善群 (人)	不変・悪化 群(人)	高まった 児童
有意味感 の変化	35	66	34.7%	36	68	34.6%	47	54	46.5%
把握可能感 の変化	40	61	39.6%	39	65	37.5%	51	50	50.5%
処理可能感 の変化	42	59	41.6%	46	58	44.2%	51	50	50.5%
SOC の変化	44	57	43.6%	46	58	44.2%	53	48	52.5%

8 成果と課題

(1) 成果について

【成果①】

学校を中心として関係者が連携しながら「やるぞ！夢ビジョン UMI 食育プログラム」を実施したことで、児童の食に対する意識の向上や食習慣について、一部の学年や項目によっては一定の改善が見られた。また、保護者もこのような子どもの変容を実感した。

【成果②】

児童の変容が「意識化」→「行動化」→「継続化」へとつながる一連の取組にした「やるぞ！夢ビジョン UMI 食育プログラム」は、子どものSOC（首尾一貫感覚）を高め、進んで健康な体づくりに取り組む子どもを育成する上で有効であった。

保護者を対象にしたアンケート結果からは、児童の食に対する意識、食習慣の向上が見られた。食に対する意識については「栄養バランスを考えた食事をとること」「朝食を食べること」「食事のマナーを身につけること」の項目が、食習慣については「栄養バランスを考えた食事の回数が増えた」「食事のマナーを身につけること」の項目について多くの肯定的な回答があった。児童を対象にしたアンケート結果からは取組の前後で大きな全体的な変容は見られなかったが、個々の児童に目を向けると食に対する意識や食習慣について良い方向に変容した児童も多く存在していたことを示すものと思われる。

また、約8割の保護者が肯定的に子どもの変容をとらえていることから、「やるぞ！夢ビジョン UMI 食育プログラム」が保護者に浸透し、その取組が好意的に受け止められ、効果を実感していることがうかがえる。

こうした成果を生み出したのは、以下のような取組の良さがあったからだと考える

- 保護者参加型の教科等における食に関する指導（学習参観）など、学校における食育の取組について、保護者に積極的に伝える機会を設けたこと。また、関係機関、団体等が連携した取組を行ったこと。
- 「朝食いきいきシート」「子どもが作る弁当の日」「もぐもぐカード」の取組など学校と家庭の双方向の連携による取組を行ったこと。
- 「子どもが作る弁当の日」「子ども料理名人」「親子料理教室」の取組など、子どもが食事の作り手の立場を体験する機会を多く設けたこと。
- 宇美町給食応援団、食に関する指導等におけるGT等、様々な人が取組をとおして子どもと関わったこと。

(2) 課題について

【課題①】

食に関する意識や食習慣の変容が見られた児童もいたが、1年間という期間では、「やるぞ！夢ビジョン UMI 食育プログラム」による、子ども自身の食に対する意識の全体的な高まりにまでには至らなかったことから、今後も取組の内容や方法を見直ししながら充実させていく必要がある。

【課題②】

朝食摂取率については、県や全国の状況と比べても依然として低い傾向にあることから、今後も学校、家庭等で連携した取組を継続していく必要がある。

食に対する意識や食習慣について、児童へのアンケート結果からは、一部の学年や項目についての高まりは見られたものの、全体としての高まりまでには至らなかった。朝食摂取率、共食の回数については改善傾向が見られず、また朝食摂取率については県平均や全国平均と比較しても低い状況にある。

今後プログラムを実施する上で以下のような点を考慮しつつ、取組を継続していく必要があると考える。

- 朝食摂取等の課題については、関係者でしっかり共有すること。その解決に向けては、本年度から始めた「朝食の日」「共食の日」等を活用し、関係者が一層連携を深め取組を進めること。
- 「朝食いきいきシート」「もぐもぐカード」「弁当の日」等のように学年あるいは全校で行う取組については、そのねらいや実施方法について教職員が共通理解をもち実施すること。
- 家庭と連携して行う取組については、そのねらいや子どもとの関わり方等について、具体的に示し理解を得ること。
- 「食」や「健康」について学習する際は、自分の問題として課題を明確に把握させる手立てを仕組むこと。また、自分で課題の解決方法を考えたり、実際に体験したりする機会をより一層充実させること。

(3) 今後に向けて

本プログラムの成果については、アンケート結果の数値等の「目に見える」成果だけではない。1年間にわたって関係者が連携し、取り組んできたことで様々なつながりが生まれ、地域ぐるみ、町ぐるみで食育を推進する体制が整備された。また、アンケート結果にも表れているように多くの保護者に「宇美町、宇美小学校」＝「食や食育を大切にする町、学校」と認識されるに至った。このことは、今後食育を推進していく上で貴重な財産になるものと考ええる。

今後は、このことを契機にさらに関係者が一層「つながって」いくことが大切である。取組を工夫・改善しながら前進させていくことでより確かな「目に見える」成果につながっていくと考える。

9 情報発信と普及の計画

- ・ 実践校や県、町のホームページ、広報誌等で取組状況や成果について発信する。
- ・ 各種研修会等で取組の内容や成果について報告する。
- ・ 事業の成果を冊子にまとめ、県内外の教育委員会や県内の学校に周知する。
- ・ 地域コミュニティを通してつながる食育推進事業の取組を保護者、地域住民に発信にする。